

知的障害者と暮らす家族との家族療法についての研究
- 終了ケースへのインタビューからみえてきたもの -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

知的障害者福祉の領域で仕事をしていると様々な苦勞をしている家族に出会う。医療的ケア、福祉的なサービスを受けるために奔走していたり、我が子の社会適応のために家でADLの向上のためにいろんな練習をさせていたり、施設への送迎をしていたりと、その動きには頭が上がらない。そして困っている姿をみると何か手立てはないかと考えてしまう。

家族療法というアプローチは、これまで、不登校や非行などいろんな症状を対象に行われてきた。症状を個人の問題としてとらえるのではなく、その個人が属する家族システムの問題ととらえ、家族が本来持つ家族自身の問題解決能力を發揮し、解決できるよう促すのが家族療法といわれる。

家族療法というアプローチは、これまで、不登校や非行などいろんな症状を対象に行われてきた。症状を個人の問題としてとらえるのではなく、その個人が属する家族システムの問題ととらえ、家族が本来持つ家族自身の問題解決能力を發揮し、解決できるよう促すのが家族療法といわれる。

知的障害者を対象にした心理療法の場合、個人の内面などへの思考には限界がある。しかし、知的障害者と暮らす家族全体が対象となれば、話しは別である。その実践はあまりなされてきていない。

よってここではその数少ない事例を取りあげ実践を報告する。それとともに、その面接過程において面接者はどんな取り組みをどんな目的で行い、その経過について分析する。そして、実際に家族療法を受けた家族からの聞き取りを実施し、援助を受けた側にとってはどんな経験であったのか報告する。そこから知的障害者と暮らす家族への家族療法の可能性を考察する。

事例（面接全10回）

本事例は筆者が、バックスタッフとして観察した事例である。知的障害のある長男の暴力行為を主訴に面接開始。父、母、姉の4人家族。長男が通所中の施設において物への暴力などの行為が発生し家族面接を受けることになりこのケースは始まった。

前期：IPは1回目の面接ではほとんど発話なし。宿題で合同家族描画が提示される。2回目はこの宿題の絵をIPに説明してもらいところから始まる。その後、毎回の宿題になった。また、この絵への採点を本人にしろ。 (IPへのエンパワメント、関わり方のモデルの提示、家族間コミュニケーションの創設) 3回目にはIPが今ある不満を表現した。

中期：IPがペンを持ちホワイトボードを用い、家族間取り図法を実施。家族自身がトラブルへの対処法を考え実施、効果が出ている。絵も変化がありIPも変化している状況を感じていることを家族は知る。通所中の施設への働きかけについても検討。

後期：トラブルはあるがそのとき我慢できるようになったというIPの変化が報告される。姉から両親へのアドバイスがあった。10回目（10回が基本となってる）となり家族本人が自分たちでやってみるとのことで終結。

面接の考察：家族それぞれにお互いに必要な距離がわかったようである。両親との適度な境界ができ、パワーは分配され、きょうだいサブシステムの機能の發揮がダメを押したという経過であった。

家族からの聞き取り：この事例の家族にインタビューし、家族面接の体験がどのようなものであったか確認する。現在IPは精神科からの薬を飲みながらトラブルもなく元気になっていた。家族は面接を振り返り1)家族面接によるIPの劇的な行動の変化はなかった。2)家族に関しても影響を受けていないと感じている。3)家族面接に通いながら、そのメリットがわかりにくい。4)IPのためにはよかった。5)家族面接があつて、今に繋がっている。6)家族が普段言えないことを言うことができた。7)家族と一緒に何かするという普段しないことをすることになった。8)姉は面接への参加を嫌がり、両親で参加させた。9)家族療法事体馴染みが無い。10)障害は夫婦のジョイントにはなる。11)相談できてよかった。と語る。ここから、現在はIPと家族の状態が安定していることが伺われた。

面接と聞き取りからの考察

この家族には面接で1)直面化(「IPとの直面化」「姉から見た親の子育てへの評価との直面化」)、2)夫婦サブシステムの構築、3)パワーの分散、4)IPという存在のリフレーミング、5)問題解決パターンの変化、6)問題解決力の向上があったようである。そして、変化に関しては今も継続できていることが確認された。うまく行っている今をつくり出しているということこそが何よりの家族の持っていたパターンが変化し問題解決力が向上したといえるのではないか。知的障害者と暮らす家族への家族療法が援助手段として可能性を持っていることが伺われた。